

LICENSED PRODUCT
3/Color
White
Magenta
Red
Yellow
Green
Cyan
Blue

濟 開 檢 廳 政 行

洪 堂 居 士 編

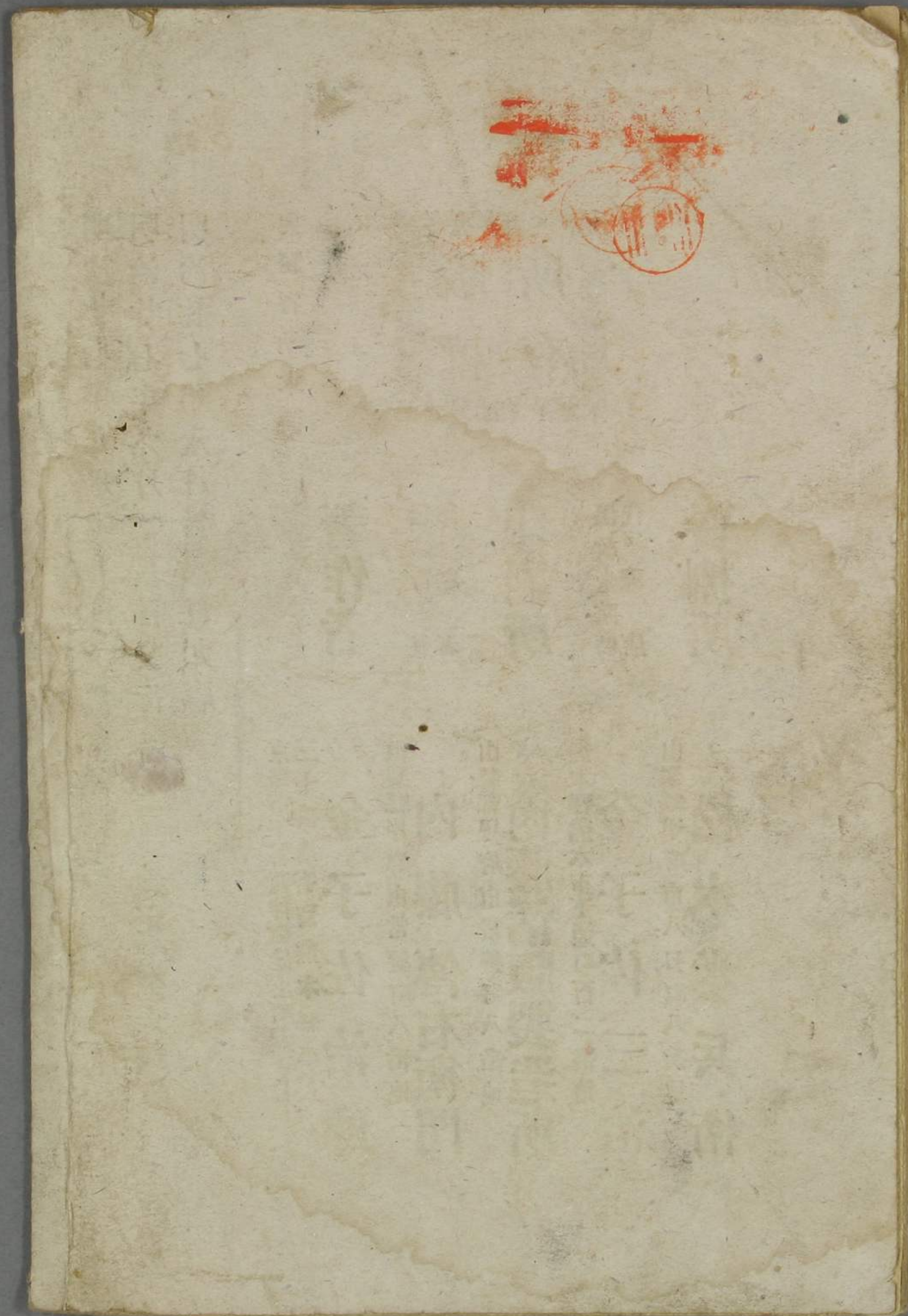
國 民 必 續
征 清 愉 快 武 志

附 錄
及 流 行 愉 快 武 志
廣 兇 島 武 誌

發 賣 元
溫 故 堂

60 65 70 75





日本維新

漢土長駝千里程日康男子
重名請看因溥堅則下
空貫忽揚万歲聲

詔勅

天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ清國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ百僚有司ハ宜ク朕カ意ヲ體シ陸上ニ海面ニ清國ニ對シテ交戰ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ苟モ國際法ニ戾ラサル限り各々權能ニ應シテ一切ノ手段ヲ盡スニ於テ必ス遺漏ナカラムコトヲ期セヨ

惟フニ朕カ即位以來茲ニ二十有餘年文明ノ化ヲ平和ノ治ニ求メ事ヲ外國ニ構フルノ極メテ不可ナルヲ信シ有司ヲシテ常ニ友邦ノ誼ヲ厚クスルニ努力セシメ幸ニ列國ノ交際ハ年ヲ逐フテ親密ヲ加フ何ソ料ラム清國ノ朝鮮事件ニ於ケル我ニ對シテ著著鄰交ニ戾リ信義ヲ失スルノ舉ニ出テムトハ

朝鮮ハ帝國カ其ノ始ニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨立ノ一國タリ而シテ清國ハ毎ニ自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ陰ニ陽ニ其ノ内政ニ干涉シ其ノ内亂アルニ於テ口ヲ屬邦ノ拯難ニ籍キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ治安ヲ將來ニ保タシメ以テ東洋全局ノ平和ヲ維持セムト欲シ先ツ清國ニ告クルニ協同事ニ從ハムコトヲ以テシタルニ清國ハ翻テ種々ノ辭柄ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ帝國ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其ノ秕政ヲ釐革シ内ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコトヲ以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ清國ハ終始陰ニ居テ百方其ノ目的ヲ妨碍シ剩ヘ辭ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩ニシ以テ其ノ水陸ノ兵備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告クルヤ直ニ其ノ力ヲ以テ其ノ欲望ヲ達セムトシ更ニ大兵ヲ

韓土ニ派シ我艦ヲ韓海ニ要撃シ殆ト亡狀ヲ極メタリ則チ清國ノ計圖タル明ニ朝鮮國治安ノ責ヲシテ歸スル所アラサシメ帝國カ率先シテ之ヲ諸獨立國ノ列ニ伍セシメタル朝鮮ノ地位ハ之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙晦ニ付シ以テ帝國ノ權利利益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲシテ永ク擔保ナカラシムルニ存スルヤ疑フヘカラス熟々其ノ爲ス所ニ就テ深ク其ノ謀計ノ存スル所ヲ揣ルニ實ニ始メヨリ平和ヲ犠牲トシテ其ノ非望ヲ遂ケムトスルモノト謂ハサルヘカラス事既ニ茲ニ至ル朕平和ト相終結シテ以テ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚スルニ專ナリト雖モ亦公ニ戰ヲ宣セサルヲ得サルナリ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス

御名 御璽

明治廿七年八月一日

内閣總理大臣	伯爵伊藤博文
遞信大臣	伯爵黑田清隆
海軍大臣	伯爵西郷從道
内務大臣	伯爵井上馨
陸軍大臣	伯爵大山巖
農商務大臣	子爵榎本武揚
外務大臣	陸奥宗光
大藏大臣	渡邊國武
文部大臣	井上毅
司法大臣	芳川顯正

自序

日清の大活劇は、韓の舞臺に開かれたり、朝鮮の獨立を扶けて、東洋の平和を維持せんとする、之れ實に吾軍の義名ある處、而して、天地神明の共に與する所以なりとす、今や我皇、斯に嚇怒して、宣戰の大詔下り、而して、幾万の健兒、身を外に勞す、豊島、牙山、勝は則ち勝なり、利は則ち利なりと雖も、要するに之れ、小勝のみ、小利のみ、豈に俄に解心放棄すへきならんや、若し夫れ、北京城頭、旭旗翩翩たるの時、清廷困頓、和議を乞は、則ち東亞の霸權吾に歸し、韓の獨立も亦固からむ、茲に於てか、始めて克く、年來の積憤を豚尾に報ひ、而して、吾軍の能事了れりと云ふ可きのみ、茲に恭しく、詔勅を拜すれば、苟モ國際法ニ戻ラサル限り各々權能ニ應シテ一切ノ手段ヲ盡クス

ニ遺漏ナカラムコトヲ期セヨ

と、吾人この大詔を拜して、奚ろ夫れ、感泣蹶起せざるを得んや、今や貴賤を問はず、貧富を論せず、各々財を獻して、軍費を補はん事を請ひ、而して、辨容四方に説きて、文人筆をとりて起つ、即ち大に國論を強ふし、敵愾の神心を張らんとするにあるのみ、予や不肖、加ふるに虚弱、故に、外に征清將士の驥尾に附して、以て豚頭を斬るの快を學ぶ能はず、而して、内にお角筆頭、壯言急語して、大に諸君の同情を求むる能はず、痛恨限りなきの情、迸つてこの小冊子を爲す、粗雑の文、卑近の調、思ふに、賢明なる諸君の瀏覽を汚すに足らずと雖も、只夫れ、赤誠微衷の存する所、幸に乞ふ之れを容れよ。

皇軍一撃平壤を破らんとするの時、鴨綠樓南窓の下

哄堂居士

ことばりかき

この愉快節といふもの、本来より云へば、彼の蓬髮垢顔の書生が、路傍に歌ふ如く、喧嘩にはあらずやと思ふ程に、怒鳴るこそ至當なれ、さあれ、それにては、余り殺風景なれば、上流の人は歌ひがたし、殊に近來は、三味線、手風琴などに合はせて、宴會置酒の興を助くる様なりたれば、全く調曲を正しく取らざるべからず、之れ著者の、尤も苦心せし處にこそ、それが爲め、他に勇壯なる句、艶麗なる語あれど、用ゆる能はざることあり、あるは又、句調に退はれて、意味を充分になし兼ねる處などあり、只大方諸君の、御指教を仰ぎまつるになん。

附録の方は、從來ありふれし愉快節の、華を集めたるにて、予の作りしにはあらぬぞかし、只参照の爲めと思ひてなり。

實は手躍りをも添ふんとて、自身某名妓につきて、形をとり、尙又そを改め、補ひたりしが、繪畫彫刻等の不便は、予をして、俄にこの慾望を遂げしめざりき、こは他日、別に小冊子として發すべけれど、躍りどて、素より一定の式あるに非ず、其意味を含ませつ、快活に舞ひなば足れり。

もとより、射利になしたるに非ず、されば價額など、なるべく、低かる様とは思へど、これも活版製本と共に、東京など一様に至りかねるは、いと口惜しき事にこそ、願ふは、愛國の感念に訴へて、些々たる事を問はずして、一本を購ひ給はらんを、しかし、多く賣らんとするは、著者自身の望みにあらず、只盛に歌ひ給ひてよ、書筐の塵に埋もれさす事、ゆめ、なし給ひぞ。

著者識

國民必讀 征清愉快ふし

出軍兵士慰勞會

登る旭の御旗をば	吹き來る風に靡かせて
轟然一發祝砲に	數千の人が大呼して
日本帝國万歳の	響山野に聞ゆるは
「これぞ兵士の慰勞會」	
鼓勇一番奮然と	なんの御國の爲ならば
仮令泰山崩るも	江河蕩然漲るも
寸分恐れず進み行き	笑つて死なんと誓ふなる
「義勇の心ぞ恃もし志」	
奮へ軍人イザ奮へ	汚せし事なき國の名と

優渥極まる皇帝の
忠肝義膽の切先に

十
詔勅をうれ畏みて
豚尾の生血を濺きつゝ

「支那の草木を染めて見よ」

キンボ、キンボ、キーンボ

兵士出軍の情

馬に草かひ劔を磨き
待ちに待ちたる出陣は
いとしき父母に血の涙
「心の苦しみ如何なるぞ」
弟妹知らぬ阿兄の志
遠く眺むる故郷の

凜たる勇氣を奮ひつゝ
いよく今か今なるか
かくして別るゝ其時の
思へば生別又死別
空はさだかに知れぬとも

雲井に遙か飛ぶ鳥の

聲もまばらに開ゆるは

「實に斷腸悲哀の至り」

かゝるかなしき有様も
無法無禮に出てしもの
なすとも尽きぬ此怨
祖先以来の切れ味を

元ばといへばチャンくの
思へば彼等を八裂に
今こゝろ揮ふ日本刀
示す武勇の振舞に

「荒膽冷やして呉れんのみ」

欣慕々々愉快々々

大鳥公使

今五稜廓裡の籠城に

驍名高き大鳥が
公使となりと泰然と

一 髪危急の中に立ち 國家の威名を重する

「誠意赤心敬慕の至り」

衆に代つて其身をば 捨てんとしたる梅の花
今又茲にかへり咲き 短き五十の人生に
前後二たび内と外 武勇文勳か、やかす

「君の譽を赫々不滅」

欣慕々々愉快々々

兵士韓山野營

馬關客舎の夢覺めて 窓を開けば日本海
一輪高く大空に 皎々輝く明月は
遠く波濤を隔てたる 在韓兵士の仮の宿

「テントの内をも照すらん」
中宵孤眠就りかたぐ 聞ゆる喇叭の音浮へて
茫然眺むる故郷の 空はいづくと目に涙

「實に万感胸を衝く」

「冥途の土産に語れかし」欣慕々々
さわれ今こそ國の爲め 犠牲に供けしこのからだ
來れチャンくイザ來れ 重なる怨の切先に
縦横無盡と切りまくる 日本男子の手の内を

大島少將

國家の安危を一身に 擔ふて起てる大島は
混成旅團の長として 在韓兵士を號令し

「進みくつて攻城野戦」

彈丸耳をかすむるも
白刃脚下にひらめくも
嚴然動かさ驚かき
千軍万馬を叱咤して

「翳す軍刀武官の譽」

尙も平壤打破り
奉天北京を陥れ

「國の武名を揚げよ君」

キンボくく愉快々々

松崎大尉の戦死

大和心を人間はゞ
旭に匂ふ山さくら
剛道武勇の松崎が
部下の兵士を厲ましつ
漲る大水何のろの
軍刀翳して躍り込る

「戦ふさまころ勇絶武絶」

あはれ其身は果敢なくも
敢なき最後に散りしとも
四千餘万の同胞が
感謝の涙を濺ぐなる
千載朽ちせぬ英名は
紀念の石碑に刻まれて
「人は武士ろと歌はれん」

欣慕々々々愉快々々

豊島の海戦

豊島附近の朝風に
偵察軍艦吉野號
續ひて浪速秋津州
日の丸國旗を翻へし
「浪を蹴立つる勇ましさ」
天地に響く砲聲に
難なく高陸打ち沈め

にけ行く操江捕獲して
凱歌の飾りとなしたるは
「實に萬足慶賀の至り」

欣慕々々々々ユカイ

牙山の陸戦

進撃喇叭の音高く
隊伍正々進み行き
成歡砲壘打ちつよし
牙山の本據を奪しは

「實に勇壯千古の快事」

卑怯未練の支那兵が
命から
跡に残りし大砲や
軍旗戦袍分捕つて

「九段坂上に陳列する」

キンボ
愉快々々

北京陷落城下の盟を夢む

北京の城は十重廿重
精練武勇の吾軍が
嚴然取捲く其内に
城下の盟の談判と
進む公使の要求に
これはと驚く血の涙
今ぞ百計つき果て、
是非なく應ずる哀さも

「實に當然至極の報ひ」

遠征万里の吾軍も
今こそ誇る凱旋の
聲すさまじき物音に
半夜の眠りも醒まされて
驟然起つて日本刀
鞘を拂へば玉ぞ散る

「滿身悚然夏尙寒し」

キンボ
くく

國民の敵愾心

皇統万世一系に
臣民忠勇絶倫の
世界に誇る美しき
歴史を持つて吾國は
今や清との交戦に
開國以來の譽をば
海外諸國に示しつゝ
東洋霸權を握るべき

「時となりけり千載一遇」

いざや進まんと諸共に
敷島男子の肝膽の
續かむ限りの努力して
國家の輿論を固めつゝ
清の戎狄是れ懲らし
海陸兵備を嚴にして
上は一天万乗の
君にぞ報ひ奉り
「下は吾々祖先の美名」

汚すことなく進み行き
萬里の波濤を蹶破りて

殖民拓地に日章の
輝く國旗を押し立てゝ

宇内万国睥睨し
雄を天地に示してぞ

「共に誇らん日本の意氣地」

キンボくく愉快々々

日清交兵

鶏林湖南の兵亂に
日清兩國衝突の

端緒開けしろの以來
互に操り出す軍兵は

韓の山河に充滿し
殺氣天地に漲りて

「實に一髮危急の姿」

元來我は隣國の
交誼を重んぶ朝鮮を

未開の域より拯ひ出し
蹂躪なしたる彼の國の
強固になして東洋の

袁世凱や閔族が
天賦自由の獨立を
先進國たる務をば

しかるも清國無禮にも
なしたる上は是非もなし

われの天威を汚さんと
精銳剛氣の譽ある
ありとわらゆる豚尾を

日本男子の腕前で

「殺し盡くして見するのみ」

忽ち來る一戰報

豊嶋附近の海戦に
壹千有餘の豚尾を

運送船を打ち沈め

うれのみならず軍艦の

海底魚腹に葬らせ
操江號を生擒し

間もなく成歡牙山にも

一大陸戦起りしが

之れも吾軍大勝利

待ちに待たる本國の

吉報もたらす日本海

「日の丸御旗の勇ましき」

天兵隊伍正々

揚子河口を溯り

一撃北京を微塵にし

城下の盟約なさしめつ

日本帝國堂々と

東亞の覇權をとる事は

「實に目前寸時の間」
欣慕々々愉快々々

征韓激論

(日清談判作り替)

征韓激論破壊せば
都の月をば後にして

西郷一派の大丈夫が
慷慨悲歌の聲高く

壯士腰間三尺の劔の切先味ひて

「暴徒各所に進撃する」

忠憤義烈の官軍は 茲處ぞ命の捨處

長銃孤劍にランドセル 天のゆるさぬ叛亂を

起せし奴原薙切りに 拔刀隊か決死隊

進んで打ち勝つ田原坂 吶喊一聲城山の

「風にゆらめく聯隊旗」

キンボ、、、

國民 必讀 征清愉快ぶし附録

日清談判

日清談判破壊せば 品川乗り出す吾妻艦

續ひて金剛浪速艦 國旗堂々と翻へし

「うらみ重なるチャン坊主」

日本男子の村田銃 劔の切先味ひて

「吾兵各所に進撃する」

難なく支那城打つおし 万里の長城のり超へて

「一里半行きや北京城よ」(通常こゝ迄)

北京城下に露營して 城下の盟の終る迄

アルタイ山の絶頂に 些々たる風に翩翩と

「旭に輝く日の丸旗」キンホ〜

利根の川邊

利根の川邊を見渡せば
アレは陸軍教導團
堂々五尺の大丈夫が
冬は打たれて雪に泣き
夏は蹴られて汗に泣く
國にまします兩親は

「如何あろばし給ふらん」

とふには羽なき籠の鳥
泳ぐにひれなき網の魚

「拜む寫眞が臆ろがほ」

待たれやまてよ暫し待て
國に變亂あるときは
あらびや駒に跨りて
數千の敵を斬り拂ひ
功を煙のうちになて
堂々勳章胸にかけ

「歸る姿は故郷へ錦」欣慕々々々々

日本男子の譽

日本男子の譽なる
百と有餘の強兵を
千里の波濤を蹴破つて
千島の端ての占守島
千辛万苦の功積んで
北門鎖鑰を堅くなし
海外諸國の侮りを
忠勇義膽の振舞を
下し給へる勅語にて

郡司大尉の企は
七艘の短艇に乗り込ませ
日本の北のろの北の
極寒凜烈無人の地
殖民拓地の實を擧げ
狡猾外奴の密獵や
防いで國威を示さんと
叡慮に協へて帝より
報効義會と名も高く

海を隔て、四百餘里
こなたの岸には日の丸の
對等權利を擴張し

實に満足慶賀の至り 欣慕々々

向の岸には鷲のはた
國旗堂々とひるがへし
富國強兵の實を擧ぐ

國事に關する

國事に關する罪犯し

入獄ありし大井氏の
新井章吾を先手とし

心底如何と問ふたれば
小林樟雄を後手となし

「都合人數が四十と五名」

爆烈彈を製造なし
難なく朝鮮一と呑と

長崎汽船に乗り込むで
思案なかばに磯山が

變心故に發覺し

大坂監舎につながれて

重罪輕罪處分され

苦役のうち計らずも

憲法發布の式を得て

大赦復權得られしは

實に満足慶賀の至り 欣慕々々

國民必讀 征清愉快ぶ志附錄終

鹿兒島武志

日本の意氣地は余ッ程強ひもの

朝鮮國を助けるチウテ チャンくメツチャく

支那の軍艦は余ッ程弱いもの

錦の御旗にかなはぬチウテ 天津へにけて行く

支那の艦長は余ッ程弱いもの
 軍艦をさし出す
 支那の袁世凱は余ッ程卑怯なもの
 天津へにけて行く
 支那の大鳥公使にかまはんチウテ
 日本の大鳥公使は余ッ程はらいもの
 大和魂見せたいチウテ
 談判をミシク

鹿兒島武志終

明治廿七年九月十七日印刷

明治廿七年九月廿二日發行

明治廿七年八月廿八日九版

(定價金六錢)

内務省納本濟

著作者

金子佐治郎

東京市下谷區仲御徒土町壹丁目三十番地寄留熊本縣平民

山梨縣甲府市常盤町八番地

内藤傳右衛門

山梨縣甲府市常盤町八番地

内藤活版製造所

熊本縣熊本市下通町百二番地

金子佐三治

山梨縣甲府市八日町八番地

松本米兵衛



印刷所

温故堂臨時店

發行兼印刷者

賣捌所